

平成 25 年 度 東京都教育委員会 言語能力向上推進校
平成 26・27 年度 東京都教育委員会 言語能力向上拠点校

研究紀要

研究主題

「思考力・判断力・表現力の育成」

～言語活動の充実を通して～



武蔵野市立第一中学校

目次

はじめに（校長挨拶）	1
研究内容	
Ⅰ 研究主題の設定理由	2
Ⅱ 目指す生徒像	2
Ⅲ 研究構想	3
Ⅳ 実施計画	4
Ⅴ 実践内容	
実践1 ポスターセッションを通じた思考力・判断力・表現力の育成	6
実践2 1分間スピーチの取組	33
実践3 各教科の授業実践	37
実践4 定期考査における「思考力・判断力・表現力」を問う問題の出題 ..	43
実践5 読書活動について	47
実践6 道徳授業地区公開講座での取組	55
Ⅵ 研究の成果と課題	57

はじめに

武蔵野市立第一中学校

校長 若槻 善隆

本校は平成 25 年度に言語能力向上推進校として、教員の言語能力向上につながる指導の在り方を共通理解するとともに、情報の整理と効果的な伝え方の研修を実施してきました。

また、平成 26 年度は言語能力向上拠点校として、前年度の活動や成果をもとに、知的活動（思考力・判断力・表現力の育成）やポスターセッションの実践を通して、更なるスキルアップを図ってきました。また、「美しい日本語を身に付ける」ことに重きを置き、「美しい日本語」をテーマとした道德の授業や講演会を実施しました。さらに、国語科では「美しい日本語」を意識した授業を展開したり、生徒の 1 分間スピーチや日常生活における発言においても「美しい日本語」を意識させたりと、意図的・計画的に取り組んできました。しかし、特にポスターセッションにおいて、聴衆も含めた参加者全員が参加してセッションが行われるというポスターセッション本来の理想像まで達することができませんでした。それは、発表者だけでなく聴衆者も含めた参加者が意見を交換する中で自分の考えを深めていくというセッションにおける基本的な点において課題があったからでした。

そこで、言語能力向上拠点校としての 2 年目の今年度は、昨年度の課題を受けて、この 2 年間の「言語活動の充実」という主題で取り組んできた実践的な研究を更に継続・深化させ、「思考力・判断力・表現力の育成」を研究主題とし、生徒の言語能力の一層の向上を図り、プレゼンテーション能力を更に伸ばすとともに、ポスターセッションのセッションの面のスキルアップを図ってきました。また、読書活動の充実を図るために年 2 回の読書週間を通して「本の国からの招待状」作成も引き続き行いました。さらに、教職員においては生徒の思考力・判断力・表現力の育成に重点を置いた効果的な授業の構築を目指すとともに、評価方法の工夫を取り入れた研究授業を全教員が行い、互いに参観し合う取組を行ってきました。

詳しい研究の概要は研究紀要に掲載しておりますが、この 3 年間講師を招聘して指導・助言をいただきながらの研究授業、アナウンサーをお招きしての「美しい日本語」指導、言語環境の工夫や読書活動の充実など、様々な取組を行ってきました。また、教員の授業力を向上させ、そのことを生徒の「思考力・判断力・表現力」の向上、学力の向上につなげたいとの思いから、研究を推し進めてきました。十分な研究成果を発表できたか甚だ心配な面もありますが、本校が今後取り組んでいくべき改善点はかなり明確になってきたように思います。

最後になりましたが、本校の研究のために、御多用の中、最新の資料を提供してくださり、懇切丁寧な御指導・御助言を賜りました、東京女子体育大学教授 田中 洋一 先生、NHK 放送センター日本語センター 加藤 昌男 様・渡部 英美 様、フリーアナウンサー 長谷川 直子 様、文化放送アナウンサー 鈴木 光裕 様に、心から御礼申し上げます。この 3 年間の実践を通して教員及び生徒が学び得たことをもとに、今後も更なる向上を目指し、言語活動を充実させていく所存です。

研究主題

「思考力・判断力・表現力の育成」

～言語活動の充実を通して～

I 研究主題の設定理由

本校は三鷹駅の北側に位置し、閑静な住宅地と商業地の両方の面をもつ地域を学区域としている。生徒の授業に臨む姿勢や学習意欲は、個人差はあるが比較的高い状況にある。生活面でも落ち着いており、学年が上がるにつれて中学生としての適切な言動をとれる生徒が多い。

東京都が実施している第2学年を対象にした「児童・生徒の学力向上を図るための調査」では、全ての教科において東京都の平均正答率を大きく上回っており、毎年安定した学力を維持している。特に「関心・意欲・態度」「知識・理解」の観点においては高いポイントを示している。一方で「読み解く力」の定着状況や「意図や背景理由を理解・解釈・推論して解決する力」については、どの教科も課題である。

また、同調査の意識調査における「学校以外で、毎日およそどのくらい学習しますか（塾や習い事は含みません）」の項目については、1時間以上家庭学習する生徒が都の平均よりも約3%から10%高い結果となっている。逆に「毎日の読書時間」については、1時間以上の生徒が都の平均よりも約5%から7%低い結果となっている。

現行学習指導要領の総則 1「教育課程編成の一般方針1」に「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない」とある。

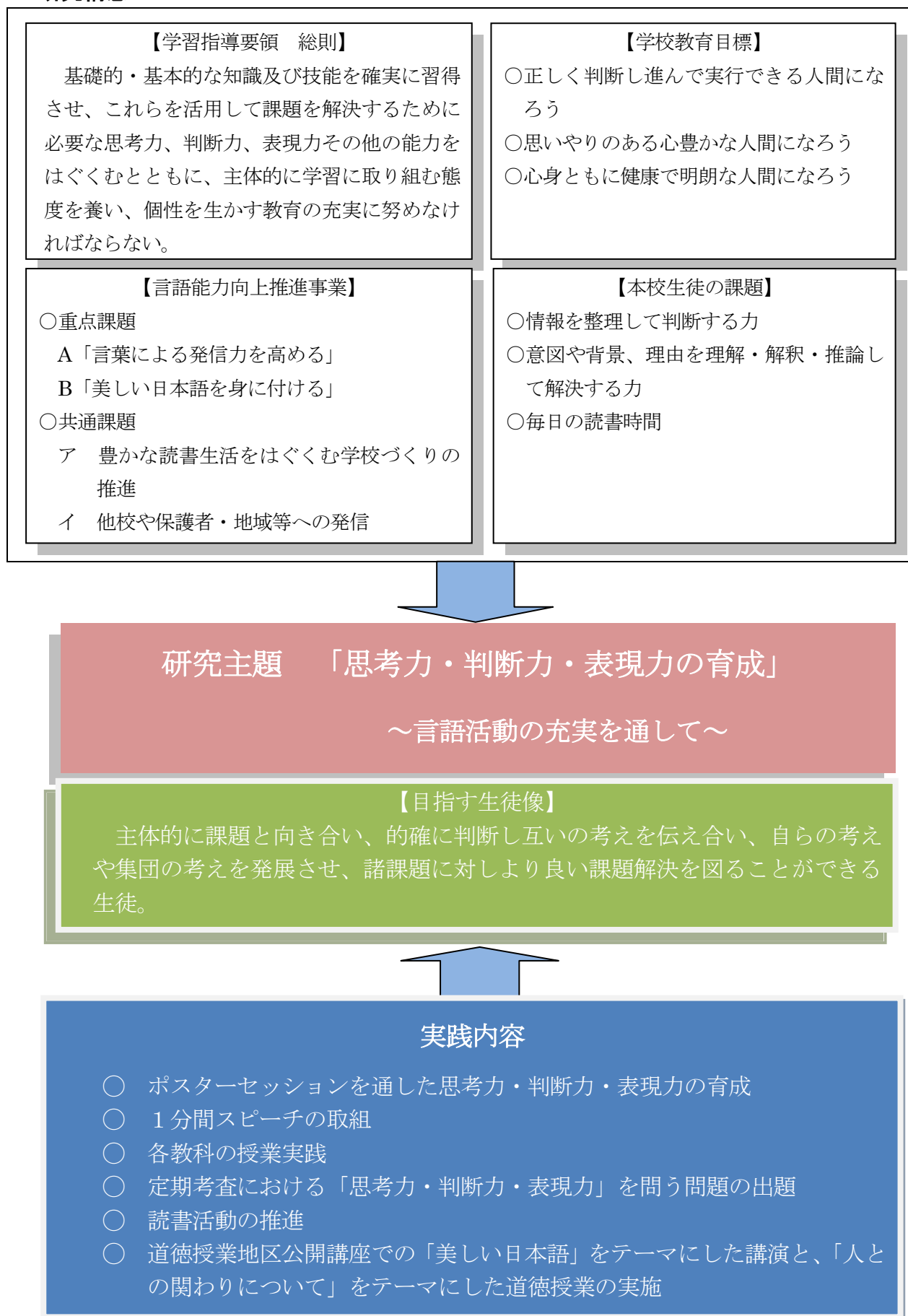
また、「指導計画の作成に当たって配慮すべき事項2－（1）」には「各教科の指導に当たっては、生徒の思考力・判断力・表現力等をはぐくむ観点から基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、生徒の言語活動を充実すること」とある。

これらのことを踏まえ、本校では、平成23・24年度の校内研修において「言語活動の充実」という主題で各教科の授業研究を進めてきた。平成25年度からはこれを教育活動全般へと発展させ、本校がこれまで行ってきた総合的な学習の時間や各行事での取組を言語活動の視点で捉え直し、その充実を図ることにより、思考力・判断力・表現力を育成していくことが、課題解決能力を一層高めていくことにつながると考え、本主題を設定した。

II 目指す生徒像

主体的に課題と向き合い、的確に判断し互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させ、諸課題に対しより良い課題解決を図ることができる生徒。

Ⅲ 研究構想



IV 実施計画

1 3年間の流れ

東京都教育委員会言語能力向上推進事業として、平成 25 年度言語能力向上推進校及び平成 26・27 年度言語能力向上拠点校の 3 年間の指定を受け、研究主題に沿った実施計画を基に研究を進めてきた。

平成 25 年度は、生徒の言語能力向上につながる指導の在り方と研究の進め方について研修を行った。これまでの校内研修の流れを生かし、外部講師を招聘して指導者側の言語活動を充実させる授業実践のスキルアップを図ることと、これまでの総合的な学習の時間や各行事での取組を言語活動の視点から捉え直し、その充実を図る指導の工夫についての研究を進めた。

平成 26・27 年度は、これまでの研究実践を更に深めていくために、外部講師を招聘しての授業研究を実施した。生徒に対してもゲストティーチャーを招聘してポスターセッションに関する助言をいただいた。また「美しい日本語」に関する講演会を道徳授業地区公開講座で実施、日常的な活動としての「1 分間スピーチ」の取組、思考力・判断力・表現力の育成がどの程度図られたかを評価するための「定期考査での思考力・判断力・表現力を問う問題」の出題、総合的な学習の時間の総括として行う「ポスターセッション」を充実させる取組を行った。

2 実施内容（具体的な実践内容は「V 実践内容」に記述）

○平成 25 年度

（1）講師を招聘しての研修会

①「プレゼンテーション～情報の整理と効果的な伝え方～」

講師：NHK放送研修センター 日本語センター 専門委員 加藤昌男氏



②「生徒の言語能力向上につながる指導のあり方と研究の進め方」

講師：東京女子体育大学教授 田中洋一氏

③「授業等における言語能力向上につながる具体的な活動の実践」

講師：東京女子体育大学教授 田中洋一氏

（2）ポスターセッション

（3）各教科の指導における思考力・判断力・表現力を育成するための取組の考察と全指導者による研究授業の実施

（4）読書活動の推進

○平成 26 年度

(1) ポスターセッション

- ・ 第2学年の生徒を対象に「自分の考えを分かりやすく伝える方法」「セッションとは」をテーマにした講話

講師：NHK放送研修センター 日本語センター 副センター長 渡部英美氏

- ・ 生徒と指導者を対象にモデル班が学年で発表し、ポスターセッションのポイントについての助言

講師：東京女子体育大学教授 田中洋一氏

(2) 1 分間スピーチ

各クラス 1 日 1 名、各学年で決めたテーマに基づき、朝学活か終学活で 300 字～400 字程度のスピーチを行う。

(3) 思考力・判断力・表現力の育成に向けた効果的な授業の構築、評価方法の工夫を取り入れた研究授業の実施

講師：東京女子体育大学教授 田中洋一氏

(4) 定期考査において思考力・判断力・表現力を問う問題の出題

(5) 読書活動の推進

(6) 「美しい日本語」についての取組

道徳授業地区公開講座において「人との関わりを豊かに～美しい日本語を通して～」というテーマで全校生徒・保護者・地域の方々を対象にした講演会（朗読含）の実施

講師：SwimmyLLP 代表 フリーアナウンサー 長谷川直子氏

○平成 27 年度

(1) ポスターセッション

- ・ セッションの充実を図るための指導者に対する研修、及び生徒への助言

講師：東京女子体育大学教授 田中洋一氏

- ・ 発表形態の工夫

(2) 1 分間スピーチ

スピーチの内容をポスターセッションのテーマと結び付ける。（環境・福祉・国際理解）

(3) 思考力・判断力・表現力の育成に向けた効果的な授業の構築、評価方法の工夫を取り入れた研究授業の実施

講師：東京女子体育大学教授 田中洋一氏

(4) 定期考査において思考力・判断力・表現力を問う問題の出題

(5) 読書活動の推進

(6) 「美しい日本語」についての取組

道徳授業地区公開講座において「美しい日本語～言葉は生きている～」というテーマで全校生徒・保護者・地域の方々を対象にした講演会（朗読含）の実施

講師：文化放送アナウンサー 鈴木光裕氏

V 実践内容

実践1 ポスターセッションを通じた思考力・判断力・表現力の育成

1 「ポスターセッション」の概要

ポスターセッションは、本校において長年にわたり「総合的な学習の時間」の活動の一環として行われてきた課題解決学習である。概要は以下の通りである。

(1) ねらい

第1学年は「環境」、第2学年は「福祉」、第3学年は前述の二つに加え「国際理解」を含めた3つを中心のテーマとして、自分たちで選択した課題について調べ学習を行い、ポスターセッションの形で発表を行い、課題解決に必要な思考力・判断力・表現力を高める。

【例：平成26年度2学年】

- ①社会には高齢者や障がい者など多様な人々が共に生活していることを知り、現代の社会にどのような福祉に関する問題が存在するのか理解を深める。
- ②多様な人々が共生していく社会の実現のためにはどうしたらよいか、自分たちにできることは何かを考え、ポスターセッションの形で発表する。
- ③上記の過程を通して、課題解決に必要な思考力・判断力・表現力を高める。

上記は平成26年度の2年生に示したねらいである。学年によって多少の違いはあるが、この学習の基本的なねらいは、学習指導要領の総合的な学習の時間の目標に示されている「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成すること」「学び方やものの考え方を身に付けること」「問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育てること」に基づき設定されたものである。自分たちで設定したテーマについて、探究的な活動及びその活動を通して得られた知見を、セッションの形で発表することで、課題解決能力を養うことをねらいとしている。

さらに、3年間のテーマを貫くものとして「共生社会の実現」という柱を設定し、生徒に提示している。「環境・福祉・国際理解」といった問題を考える背景には、世界中の人々が共に生きていくことのできる、持続可能な共生社会の実現を目指すために、という大きなねらいがある。生徒には、この「共生社会の実現」のために、自分たちが扱うテーマについて広い視点から分析するとともに、自分たちに何ができるかという身近な視点でも考えるように指導している。このことは、総合的な学習の時間のねらいである「自分の生き方を考えることができるようにすること」と深くかかわっている。

(2) 研究主題との関連について

本校の研究主題である「思考力・判断力・表現力の育成 ～言語活動の充実を通して～」を実現するための手立ての一つとして、このポスターセッションの取組を活用することが効果的であると考えた。その理由は以下の通りである。

①ポスターセッションの活動自体が「思考力・判断力・表現力」の育成をねらいとしたものであること

この活動では、5人～7人程度の班で、

- (ア) 設定したテーマについて、「現状の問題点」「原因」「解決策」などについて調べる。
- (イ) (ア) を基に、課題解決に向けた自分たちの提言を考える。
- (ウ) これらを分かりやすく伝えるための効果的な手法を考え、ポスターなどにまとめる。
- (エ) その内容を他の生徒に向けて発表し、セッション（討議）を行う。

という活動を行う。

(ア)(イ)のステップでは、自分たちで設定した課題について分析・整理する「思考力」、そこから自分たちはその課題をどう捉え、それに対してどう考えるかという「判断力」が求められる。そして(ウ)(エ)のステップでは、それをどのように相手に伝えるかという「表現力」が求められる。また、(エ)のステップでは、参加者とのやり取りの中で課題について考えを深める「思考力」「判断力」も求められるといえる。

そして、(ア)～(ウ)のステップで行われる班での話し合いや自分たちの考えを言語化する活動、(エ)のステップにおける発表やセッションなど、一連の活動のほぼ全てが言語活動である。

②3年間通して行われる活動であるため段階的な育成が可能であり、上級生のセッションに下級生が参加するため、下級生が上級生から学ぶことができること

この取組はテーマを変え、基本的には同じ形で3年間継続して行われる。そのため、発達段階に応じた系統的な指導の工夫が可能である。

そして、上級生のセッションに下級生が参加するため、その発表を見た下級生は上級生の発表から学びを得ることができる。また、下級生の発表に上級生が参加することになる。上級生は一度似たテーマでの発表を経験しているため、下級生へのアドバイスや、下級生の気付かない視点から指摘をすることもできる。

ポスターセッションの取組概要

【ねらい】

第1学年は「環境」、第2学年は「福祉」、第3学年は前述の二つに加え「国際理解」を含めた3つを中心のテーマとして、自分たちで選択した課題について、調べ学習やポスターセッションの形で発表を行い、課題解決に必要な思考力・判断力・表現力を高める。

【平成 25 年度までのポスターセッションの課題】

- (1) 課題を整理する基本的な考え方の理解が不十分である。
- (2) 提言が一般的・抽象的になりがちである。
- (3) パフォーマンスの工夫に走りがちである。
- (4) セッションの成立が難しい。

【平成 26 年度の取組】

【重点指導項目】

- ①課題解決の基本的な手順を理解させ、参加者にも分かりやすい発表の構成を組み立てられるようにする。
- ②問題点を的確に捉え、解決すべき課題の理解を深め、自分達の提言を具体的に明確なものにさせる。
- ③発表者は参加者に考えてほしいことを明確化し、参加者にも自分の考えをもつことを意識させる。

【指導の工夫・手だて】

- 工夫1 問題点を的確に捉え、解決すべき課題を整理するためのワークシート
- 工夫2 ポスターセッションのスキルアップ
- 工夫3 提言を具体化させるためのワークシート
- 工夫4 発表改善のための指導
- 工夫5 自分達が議論したいことを明確にさせるための指導
- 工夫6 参加者が自分の考えをもつためのワークシート
- 工夫7 評価の工夫

【成果】

- ・課題を整理する基本的な手順の理解がある程度進んだ。
- ・発表者側に主張や提言を具体化しようとする意識が高まった。
- ・発表者側にセッションをしようとする意識が見られた。

【課題】

- ・課題を整理する基本的な枠組みの理解には個人差があった。
- ・主張や提言の具体化が不十分な班もあった。
- ・セッションが実現していた班は少数で、多くの班は質疑がない、もしくは発表者が指名して感想を述べてもらうというところで終わっていた。

【平成 27 年度の取組】

【平成 27 年度の重点指導項目】

- ①発表者は問題点を的確に捉え、解決すべき課題についての理解を深め、自分達の主張・提言とその根拠を明確にして発表できるようにする。
- ②発表者は参加者に考えてほしいことを明確化し、そのことについて参加者も自分の考えをもち、セッションに参加することができるようになる。

【指導の工夫・手だて】

- 工夫1 課題を整理するためのワークシート
- 工夫2 セッションの進め方の工夫
- ①セッションに適した場づくり
- ②セッションテーマを明確にさせる指導
- 工夫3 参加者向けのプログラムの工夫
- 工夫4 参加者側の事前学習

2 平成 25 年度までの取組の状況と課題

本研究を始めるにあたり、ポスターセッションの活動を通して「思考力・判断力・表現力」をより高めていくために何が必要なのか、現状を整理した。平成 25 年度までのポスターセッションの現状からは、以下のような課題があると考えられた。

(1) 課題を整理する基本的な手順の理解が不十分である

課題解決をする上での基本的な手順は、「現状・問題点の指摘と課題の把握」「原因の分析」「解決策の検討・実施」である。これらの基本的な考え方の理解が不十分なせいか、インターネットや書籍で調べた情報を、班でどのように整理すればよいのか困っている様子が見られた。また、原因分析不足による解決策のずれや、論理の飛躍が見られた。

(2) 提言が一般的・抽象的になりがちである

発表においては、課題解決に向けた自分たちの「提言」を必ず組み込むように指導を行ってきた。しかし、平成 25 年度までの発表においては、その内容が非常に一般的・抽象的なものになりがち傾向があった。例えば、高齢者福祉の問題であれば「お年寄りに思いやりをもって接しよう」、環境問題であれば「自分たちにできることを考えて取り組もう」といった具合である。

この原因としては、大きく二つのことが想定された。

一つ目は、生徒の活動が調べたことをまとめることに留まっており、テーマとして扱っている社会問題について当事者意識をもって具体的な解決策を見いだすところまでに至っていないことである。

二つ目は、テーマによっては提言を具体化することが難しかったということである。これまで提言を考えさせる際には、必ず「自分たちの身近な問題に寄せて考える」ということを指導してきた。しかし、必ずしも中学生にとって身近ではないテーマでは、自分たちにできることがほとんどない、というケースもあった。例えば、「障がい者雇用」の問題においては、障がい者雇用の促進が進まないという現状に対し、中学生にできることを考えるというのは難しい。そのような場合には、「障がい者の立場に立って考えるようにしよう」といった一般的な提言となってしまうことは、ある意味仕方のないことであったと思われる。

(3) パフォーマンスの工夫に偏りがちである

例年、生徒たちは参加者に分かりやすく伝えるための工夫として、ポスター以外にも「劇やクイズを取り入れる」「ニュース番組風にする」などの工夫をしてきた。しかし、準備段階の様子からは、問題点を的確に捉え、解決すべき課題を深く掘り下げ、討議することなくパフォーマンスの工夫に偏ってしまう班も見られた。

(4) セッションの成立が難しい

「ポスターセッション」と銘打っている通り、本来は発表を受けて、参加者からの質疑を交えたやり取りから、そのテーマについてのお互いの理解を深めることをねらっていた。しかし現実には、参加者から質問が出ることはほとんどなく、やり取りとしては発表者が参加

者を指名して感想を述べてもらう、という程度の班が多かった。つまり、ほとんどの班は一方的な「発表活動」に終わっており、セッションを通して理解を深める、ということは少なかったと言える。

この原因としては、大きく三つのことが想定された。

一つ目は、発表を聞く生徒側にテーマについての予備知識がなく、受け身的に発表を聞いてしまうということである。通常、セッションを通してお互いの理解を深めるためには、前提となる知識の土台がある程度揃っていることが必要であると考えられる。発表を聞いて初めてそのテーマについて知った、という状態では、発表に対し疑問や意見をもつことは難しいのではないかと考えられた。

二つ目は、セッションというもののイメージが生徒の中にないことである。テーマについて質問や意見を交わし合うことで理解を深めていく、という経験がそもそも生徒の中に少ないのではないかと考えられた。

三つ目は、場の設定である。発表では、一つの班の発表について平均して 30～40 人程度の参加者がおり、発表者の方を向いて取り囲むような形になっている（資料 1）。このような場では、自分の意見や疑問を述べるのは緊張感が高く難しいのではないかと考えられた。また、体育館で同時に複数の班が発表しているため、お互いの班の声が混ざってしまい、通常この距離で話す声のボリュームではほとんど聞こえない、という状態であった。

資料 1 発表イメージ



3 平成 26 年度の取組

(1) ねらい

先に述べた平成 25 年度までの課題も踏まえ、平成 26 年度のポスターセッションについては、従来の形式を踏襲しつつ、以下のことを重点的に指導することをねらいとした。また、対象は平成 26 年度の第 2 学年とした。

- ①課題解決の基本的な手順を理解させ、参加者にも分かりやすい発表の構成を組み立てられるようにする。
- ②問題点を的確に捉え、解決すべき課題の理解を深め、自分たちの提言を具体的で明確なものにさせる。
- ③発表者は参加者に考えてほしいことを明確化し、参加者にも自分の考えをもつことを意識させる。

聞き手となる参加者も含め、その場の全員が参加してセッションが行われる、というのが本来の理想の姿であるが、そのためには参加者が「自分の考えをもつ」ということが前提となる。平成 25 年度終了時点では、参加者はもちろんのこと、発表者がはっきりとした自分の考えをもつことに課題があった。そのため、まず発表者自身が課題に対する理解を深めて分かりやすい発表ができるようになることや、参加者に伝えたいことを明確化することに力点をおき指導することとした。また、参加者については、「受け身ではなく、自分なりの考えをもって聞く」という意識でセッションに参加することをねらいとした。

(2) 指導計画・指導の手立て

平成 26 年度第 2 学年のポスターセッションの指導計画は以下の通りであった(表 1 p.12)。基本的な流れは例年と同様であったが、いくつかの場面において、前記したねらいの実現のための手立てを工夫した。

工夫 1 問題点を的確に捉え、解決すべき課題を整理するためのワークシート

(別紙 1 p.22)

テーマについての調べ学習をする際に、問題点を的確に捉え、解決すべき課題を整理するために、「現状と問題点」「原因」「解決策」といった枠組みを示したワークシートを配布し、使い方について指導を行った。

表1 平成26年度 第2学年 ポスターセッション指導計画

11月	福祉についての事前学習 (1) 介護の仕事の実際についての話 講師：中浜崇之氏（世田谷デイハウス アイデア北烏山） (2) 高齢者疑似体験学習 ・日常生活の中で、高齢者が困ることや支援が必要な場面に関する疑似体験をした。 講師：市民社会福祉協議会・ふれあい福祉学習検討委員会の皆様 (3) 認知症についての話 講師：市民社会福祉協議会・ふれあい福祉学習検討委員会の皆様
11月26日（水）	ポスターセッションのテーマ決め・フィールドワーク先の決定
12月1日（月） ～ 12月8日（月）	フィールドワーク（事業所訪問）に向けての準備 ・テーマについての調べ学習、質問事項の検討など（工夫1）
12月10日（水） ～ 12月17日（水）	フィールドワーク
1月9日（金） ～ 1月16日（金）	発表内容の検討・ポスター作成
1月19日（月）	ポスターセッションスキルアップ（工夫2） 講師：NHK放送センター 日本語センター副センター長 渡部 英美氏
1月20日（火） ～ 1月28日（水）	ポスター作成・原稿作成（工夫3）
1月29日（木）	ポスターセッションについての指導（工夫4） 講師：東京女子体育大学教授 田中 洋一氏
1月30日（金） ～ 2月6日（金）	原稿作成・発表準備（工夫5）
2月9日（月）	発表リハーサル
2月10日（火） ～ 2月16日（月）	発表準備
2月17日（火）	ポスターセッション当日（工夫6・7）

工夫2 ポスターセッションのスキルアップ（ワークシートは別紙2 p. 23, 24）

NHK放送研修センター 日本語センター副センター長の渡部英美氏を講師に招き、第2学年生徒対象にポスターセッションのスキルアップの講演をしていただいた。

講習会でのポイントは大きく以下の5点であった。

《内容》

- ①フィールドワーク（生徒は実地調査としてテーマと関連した事業所に訪問）で知ったことを整理し、そこでの発見・驚きを大切にすること
- ②①で得たことをおおもと＝コンセプトとして、現状・課題・解決策を整理し、自分たちが伝えたいことを明確にすること

《伝え方》

- ③音声言語と文字言語の特徴を踏まえて、「話しことば」で伝えること
- ④聞き手一人一人を意識して「ONE ON ONE」で話すこと
（聞き手一人一人に「あなたに話している」という意識で話すこと）
- ⑤会場と一体となることを目指し、会場とのやり取りをするための工夫をすること

工夫3 提言を具体化させるためのワークシート（別紙3 p. 25）

ある程度情報が整理され、発表の骨格が出来上がってきた段階で、提言とその根拠が明確になっており、班員に共有されているかを確認するための指導を行った。その際に用いたのが別紙3のワークシートである。

工夫4 発表改善のための指導

東京女子体育大学教授の田中洋一氏を講師に招き、実際にリハーサルを見ていただいて、発表の改善のための御指導をいただいた。

当日は2つの班が代表して発表を行った。その発表を踏まえて、表現方法の工夫などについて評価いただく一方で、提言の具体性の甘さや、その根拠を整理して伝える発表の構成に課題があることなどを御指摘いただいた。また、全体を通して、相手意識をもつことの大切さについて具体例を挙げながら御指導をいただいた。

工夫5 自分たちが議論したいことを明確にさせるための指導

リハーサルなどの事前指導の段階で、自分たちは「参加者に何を考えてほしいのか」「何について議論をしたいのか」を明確にするように指導を行った。

工夫6 参加者が自分の考えをもつためのワークシート（別紙4 p. 26）

参加者一人一人に、自分が参加した班の発表について、自分の考えをもたせるためのワークシートを配布した。（なお、平成25年度まではプログラムに評価を記入するだけの仕組みであった。）

また、当日は1回発表が終わるごとに、このシートの記入と質疑応答のための時間を2分間設定した。（平成25年度までは質疑応答の時間も含め〇分、という設定の仕方であった。）

加えて、発表全体を通して福祉の問題について考えたことを記述する欄も設定した。

工夫 7 評価の工夫（別紙5 p.27）

平成 25 年度までは「パフォーマンス賞」という名称で、参加者の投票により賞を決定していた。年度によって多少違いはあるが、主な評価の観点は以下の通りであった。

- ① 内容が理解しやすいか。
- ② ポスターは要点をまとめ分かりやすい表記等の工夫がされているか。
- ③ プレゼンテーションは班で協力し聴き手に伝わりやすい発表であったか。

しかし、例年の投票結果からは、内容以上にパフォーマンス（表現方法がユニークだった、面白かった）が過剰評価となる傾向があった。

そこで、発表者・参加者双方に「内容面」の重要性をより意識させるため、「内容部門」「発表部門」の二つを設定し、それぞれに投票・選出を行う形とした。

（3）成果と課題

（1）に挙げた 3 点のねらいについて、それぞれの成果と課題は以下の通りである。

- ①課題解決の基本的な手順を理解させ、参加者にも分かりやすい発表の構成を組み立てられるようにする。

《成果》

準備段階の生徒の取組を観察していると、「現状」「問題点」「原因」「課題解決策」といった枠組みを活用して調べ学習を行ったり、「この問題点の原因は何だろう？」など、話合いに活用して論点を整理したりしている様子が見られた。

また、指導する際にも「この解決策では、この問題の原因はクリアできないのではないか」「この現状の問題点は何で、何を課題としてとらえたのか」といったように、この枠組みを活用しながら思考を掘り下げていくことができた。

この枠組みをポスターにも活用し、整理した班もあった。これらの班は、発表の流れも大体このポスターに沿っていた。基本的なまとめ方ではあるが、分かりやすく参加者に情報を伝えるには効果的だったのではないかと考えられる。

《課題》

日頃あまり意識している考え方ではないこともあり、この枠組みをどれだけ活用して考えられるか、ということには個人差があったように思われた。また、参加者に楽しく聞いてもらいたいという思いから、生徒は劇やクイズなどの様々な工夫を凝らしていたが、そのことが必ずしも効果的に伝えることにつながっていない班も見受けられた。

②問題点を的確に捉え、解決すべき課題の理解を深め、自分たちの提言を具体的で明確なものにする。

《成果》

準備の段階で、主張や提言をはっきり具体的にすることについては、多くの班がかなり意識しているように思われた。

言葉としてまとめられた提言は「作ろう！子どもたちのための環境を」や「現状を理解し差別や偏見をなくそう」といったように、抽象度が高いものが多い。しかし、発表においては、そう考えた根拠や内容を具体的な例を挙げながら説明できている班が多かった。

このことは、生徒の振り返りアンケートの集計結果（表 2 p. 17）にも表れている（アンケート用紙は別紙 6 p. 28, 29）。アンケートの項目⑤「自分たちが伝えたいこと（主張や提言）を明確にして伝えることができたか」ということについては、74%の生徒が「よくできた」「できた」と答えており、他の項目と比べても相対的に高い。このことは、実際の質は別として、生徒が主張や提言を明確に意識していたことの表れだと言える。

アンケート項目⑨「去年と比べて意識して取り組んだことやできるようになったと思うことを書きましょう。」の自由記述の例

- ・聞き手の方と少しだけですが、セッションができたと思います。また、去年のポスターセッションの提言はあいまいで、はっきりとは自分たちの意見を伝えることができず、ただ調べたことを話すだけの発表でしたが、今年は自分たちの意見を交えて発表することができたので良かったと思います。
- ・説明ばかりにならず、劇を使って発表したことにより、伝えたいことがはっきりしたこと。原稿をずっと見ないで言えたこと。調べたことだけの発表にならず、調べたことに対する自分の意見をもつことができた。
- ・去年は調べたことをただポスターに書いて発表するだけだったけど、今年は自分たちのテーマについて考えることができた。自分でも思った以上に認知症について考え、意見をもつことができたので良かった。去年より聞き手に伝えようという気持ちがみんなにあった。

このように「自分の意見をはっきりさせた」「提言を明確にすることを心がけた」というような記述が見られた。

《課題》

多くの班で提言が具体的になってはいたが、抽象度が高いまま、あるいは根拠が明確ではない班も見られた。指導において「どうしてその提言にしたのか」と問い掛けると答えに詰まる、もしくは根拠をはっきりと示せない班もあり、それがまとまりきらないままに本番を迎えてしまった班もあった。

また、ねらいの①の場合と同様に、理解度や思考の深さに差が大きいことも課題である。同じ質問をしても班員によって違った答えが返ってくることや、リーダーとなる生徒以外は適切に答えることができない班などもあった。発表における自分の役割は果たしていても、発表の内容について根拠から十分に理解することには課題が見られた。

③発表者は参加者に考えてほしいことを明確化し、参加者にも自分の考えをもつことを意識させる。

《成果》

発表に際して、参加者を巻き込もう、参加者とセッションをしようという努力が見られた班もあり、実際にいくつかの班で活発な質疑応答が行われていた。また、参加者からの意見が出ないところでは指名して考えを述べてもらうなどの工夫がみられた。

また、セッションの参加者には、発表を聞いて考えたことを記入してもらったが、多くの生徒が真剣に、複数行にわたり自分の考えを記入していた。

アンケートの項目⑦「セッションに挑戦してみて、難しいと思ったことや、工夫してうまくいったことを書きましょう」の自由記述の例

- ・よりセッションを行えるよう、提言を詳しくし、相手に伝えるという気持ちを強くもった。また、相手にも意見をもってもらいたくて、セッション中に問いかけたり、最後に聞いたりといろいろと工夫した。また、劇などをシンプルにし、大事なことを分かりやすくし、大事なことは何度も繰り返すようにした。
- ・相手がどう思っているのかを聞き出すような感じで話すことができた。
- ・自分たちの意見だけでなく、聞き手側にも意見を求めることができ、改めて、自分たちもより深く考えることができた。
- ・前はただ調べたことを述べるだけのポスターセッションだったが、今回は意見交換などちゃんとしたセッションができたので良かった。

《課題》

アンケートの項目⑦「セッション（観客の人と意見交換や質疑応答をする）はできましたか」の平均値が3.2と他の項目に比べて低く、また「できた」「よくできた」という割合は40%程度にとどまった。項目⑨の自由記述欄においても、「セッションをするのが難しかった」という記述が数多く見られた。

また、この欄の記述からは、セッションが難しかった理由として、大きく以下の3つが挙げられていた。

（ア）参加者の人が意見を述べてくれなかった、参加してくれなかった（多数）

（イ）参加者にうまく質問できなかった、答えやすい質問を用意できなかった

（ウ）伝えたいことを明確にすることができなかった

（ア）に類する記述が最も多かった。原因としては、体育館という環境の問題や、参加者に予備知識がないこと、参加者の聞く姿勢の問題などが挙げられた。また、参加者が意見を述べない原因に、（イ）のような発表者側の「質問の質」を挙げる生徒もいた。

一方、参加者が記入したワークシートからは、しっかり記述している生徒が多いものの、意見ではなく感想にとどまっているものや、発表の主題とは関係のない表現の工夫についての意見を述べている生徒も多かった。「発表者の発表内容に対して自分の考えをもつ」という目標については、達成したとは言い難い状況と思われた。

表2 振り返りアンケートの集計結果

	平均値	できなかった	あまりできなかった	だいたいできた	できた	よくできた
項目① 興味深いテーマを選ぶことができたか。	3.55	5.1%	12.1%	31.3%	26.3%	25.3%
項目② 割り付けを工夫し、魅力的なポスターを作成することができたか。	3.79	1.0%	8.9%	33.7%	22.8%	33.7%
項目③ 「ポスターセッション」のための役割を分担し、積極的に準備に取り組めたか。	3.57	6.9%	10.9%	24.8%	32.7%	24.8%
項目④ 聞き手に説明が伝わるように「ポスターセッション」の発表ができたか。	3.65	1.0%	8.9%	34.7%	34.7%	20.8%
項目⑤ 自分たちが伝えたいこと(主張や提言)を明確にして伝えることができたか。	4.00	1.0%	7.0%	18.0%	39.0%	35.0%
項目⑥ 他のグループの発表を興味深く聞くことができたか。	4.27	4.0%	2.0%	11.9%	27.7%	54.5%
項目⑦ セッション(観客の人と意見交換や質疑応答をする)はできたか。	3.22	9.4%	12.5%	38.5%	26.0%	13.5%

4 平成 27 年度の取組

(1) ねらい

平成 26 年度の取組の結果から、発表する側に「提言を具体的にする」や「調べたことをただ伝えるのではなく、参加者を巻き込んでやり取りをしていく」という意識は高まってきたものと思われる。

一方で、2 の項で挙げた「(4) セッションがほとんど成立していない」という点については、試みてはみたものの効果的なやり方が分からない、参加者の側にも心構えや準備が必要である、ということが分かってきた。

このことを踏まえ、平成 27 年度は「セッションを通して発表者・参加者の双方がテーマについての理解を深める」ことができている状態を目指し、以下のことを重点的に指導する。また、対象は昨年度から継続して平成 27 年度の第 3 学年とした。

- ①発表者は問題点を的確に捉え、解決すべき課題についての理解を深め、自分たちの主張・提言とその根拠を明確にして発表できるようにする。
- ②発表者は参加者に考えてほしいことを明確化し、そのことについて参加者も自分の考えをもち、議論に参加することができるようにする。

(2) 指導計画・指導の手立て

平成 27 年度第 3 学年のポスターセッションの指導計画は表 3 (p. 19) の通りである。上記のねらいの実現のために、指導過程に工夫をするとともに、会場の設定・発表方法などの仕組みの部分についても変更を加えることにした。

工夫 1 問題を整理するためのワークシート

昨年と同じ整理の仕方のワークシートを活用することにより、考え方の定着をねらうこととした。調べ学習の際に生徒はこのシートを使いながら役割分担などをスムーズに行えており、情報収集の段階の様子からは、この整理の仕方に慣れてきていることが見て取れた。

工夫 2 セッションの進め方の工夫

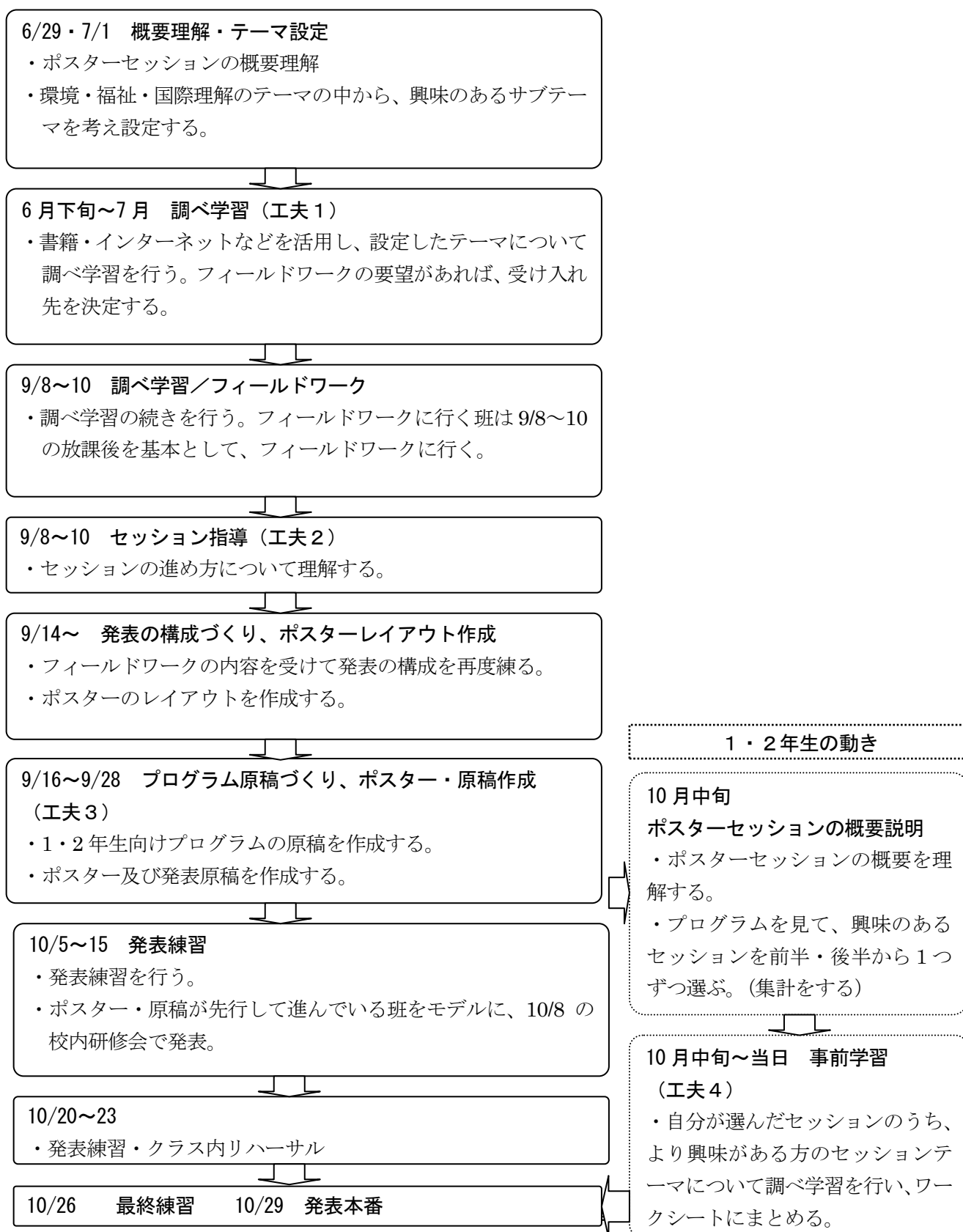
①セッションに適した場づくり

これまでは体育館で全ての班が発表を行っていた。そのため、他の班の発表や参加者の声が混ざり、過度に大きな声で発表しなければいけない、質疑応答の内容が聞こえない、といった問題が起こっていた。本年度は、この問題点をクリアするために、各教室に分かれて発表を行うことにする。

また、議論しやすい場づくりも合わせて行う。まず、図 1 (p. 20) のように、参加者をグループに分けて着席させる。発表を聞いた後、議論のテーマについてグループで意見を交わし合った後に代表者が発表するという形式で行う予定である。このことで、全体の前で発言をする、という抵抗感を和らげること、自分の意見や考えを表出しやすくすることをねらっている。

(別紙 7 : 「セッションの進め方」 p. 30)

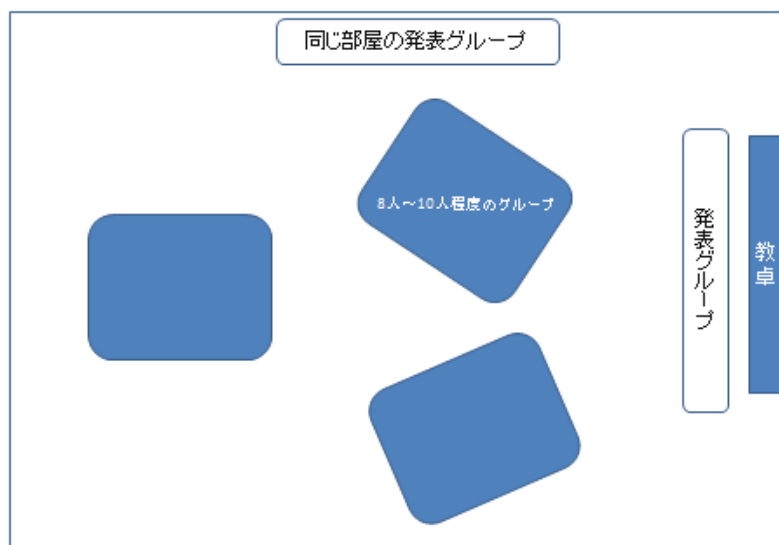
表3 平成27年度第3学年3 平成27年度第3学年 ポスターセッション指導計画



②セッションテーマを明確にさせる指導

発表を聞いて「さあ、考えたことを議論しましょう」では、議論は始めづらい。議論の焦点を明確にすることで、参加者は何について考えればよいのかがはっきりし、意見ももちやすくなると考える。そのため、本年度は「参加者と何を議論したいのか(セッションテーマ)」を明確にするよう、準備の段階から指導していく。

図1 発表会場レイアウトイメージ



工夫3 参加者向けのプログラムの工夫

発表を聞いて理解を深めてもらうために、本年度からは参加者となる他学年も事前学習を行う。そのために、各班の発表内容について掲載されたプログラムを早い段階で作成し、他学年に配布することにした。

また、プログラムの内容も、例年は簡単な内容紹介にとどまっていたが、本年度からは発表内容の概要が分かるように情報量を増やした。また、参加者と議論したいこと＝セッションテーマを明示することで、他学年が何について事前に考えてくればよいのかがはっきりするように工夫することにした。(別紙8 p.31)

工夫4 参加者側の事前学習

工夫3で示したプログラムを参照しながら、参加者はどのテーマを聞きに行きたいかを選択し、そのテーマについて事前学習を行うこととした。発表をより主体的に聞くために、事前に自分なりの疑問や、現時点でのセッションテーマに対する意見を書く構成になっている。(別紙9 p.32)

5 考察

今回の言語能力向上拠点校としての取組は、本校に長年根付いてきたポスターセッションという活動の在り方を見直す契機となった。

従来のポスターセッションは、環境・福祉・国際理解という、これから社会に出て行く上で大切なテーマについて、調べ学習で理解を深め、発表活動を通して表現力を磨く大きな機会であった。中学生ならではのユニークな様々な工夫が見られ、それらを上級生から下級生が学ぶ「学び合い」の場でもあったといえる。また、3年間の積み重ねの中で、生徒の表現力が確かに高まっていく様子も見て取れていた。

このような理由から、近年ポスターセッションは本校の学校行事の一つとして定着しており、その在り方に疑問をもつことはあまりなかった。しかし、今回「生徒の思考力・判断力・表現力を育む場」としてこの活動を捉え直してみると、その在り方に様々な工夫の余地があることが見えてきた。

中でも、「発表者と参加者双方がセッションを通してテーマへの理解を深める」ということは、我々大人の学会や会議などの場を見ても、決して簡単なことではないと考えられる。しかし、その場の成員が知見や意見を出し合い、それが共有されることで、その学びの効果は大きなものとなる。

単なる発表活動にとどまらず、議論をすることや意見を共有することを通して参加者全員の思考力・判断力・表現力を育んでいくことができる、ポスターセッションはそのような可能性をもった場であると考ええる。今後この2年間の取組をしっかりと振り返り、さらにより形を模索していきたい。

実践2 1分間スピーチの取組

1 取組のねらい

- (1) 言葉による発信力を高める活動として、相手など目的に応じたスピーチの内容を考え発表することにより、思考力・判断力・表現力の育成を図る。
- (2) 人前で発表することに慣れると共に、級友のスピーチを聞くことで、自分の考えや意見を見直し、見識を広げる機会とする。

2 取組の内容

(1) 時期

平成26年5月～ / 全学年 / 通年

(2) 方法

- ア. 各クラス1日1名、朝学活か終学活で300字～400字程度のスピーチを行う。
- イ. スピーチ内容は事前に用意させ、担任のチェックを受ける。

(3) スピーチテーマ

平成26年度

- ア. 第1学年1学期 私の好きな○○
 - 2学期 私の尊敬する歴史上の人物・今、私の頑張っていること
 - 3学期 こんな先輩になりたい
- イ. 第2学年1学期 私の好きな○○
 - 2学期 最近気になるニュースや出来事
 - 3学期 私がこれから頑張りたいこと
- ウ. 第3学年1学期 私の好きな○○
 - 2学期 部活動で学んだこと
 - 3学期 これからの抱負

平成27年度

- ア. 第1学年1学期 自己紹介
- イ. 第2学年1学期 興味のある(将来になりたい)職業
- ウ. 第3学年1学期 自分でテーマを1つ決めて、自分の意見を発表する

(4) 指導の工夫

ア. 話し手への指導

まずは人前で話すことに慣れるように、ステップを踏んで指導した。例えば第1学年1学期であれば、原稿を見て発表してもよいこととした。2学期からは原稿を見ずに発表するように指導した。第2学年では原稿を書かずに、メモを基に話すよう指導した。

イ．聞き手への指導

主体的に聞く姿勢をつくるため、スピーチを聞き終わった後に感想や発表者の良かった点、自分に取り入れたい点を書かせる指導を行った。そのコメントに対して学級担任が目を通し、適宜フィードバックを行った。話を聞いている最中に顔を上げる、話し手と目を合わせる、うなずくなどの傾聴スキルも同時に指導した。

ウ．テーマ設定の工夫

スピーチが行われる時期や生徒の発達段階、学校行事に合わせてテーマを設定した。例えば平成 27 年度の 1 学期は、1 年生であれば「自己紹介」（特に学校では見せない自分の一面について知ってもらう）、2 年生は 2 学期に控えている職場体験に合わせて「興味のある職業」（相手に紹介したり説明したりする）、3 年生に関してはポスターセッションのテーマともつなげ、「環境」「福祉」「国際理解」の中から 1 つ選んで自分の意見を発表するというものにした。

（５）スピーチ原稿用紙（平成 26 年 第 1 学年 3 学期）

	目標
	1分間スピーチ 提出用原稿
	第四期 テーマ「こんな先生になりたい」
	組 番 名 前
	先生千夏7
	・二百字〜四百字程度を目標に書きましょう。
	・書いたら先生のチェックをもらいましょう。
	・先生のチェックは、自分のスピーチの音が悪く回って来る日（学校が休みの日を除く）までです。
	・先生のOKが出たら、家で繰り返し読んで、覚えらるるよう頑張ります。

スピーチメモ用紙 (平成 27 年 第 2 学年 2 学期)

1. 自分スピーチのテーマ	2. 年 組 番 名前	第6期 テーマ 「日本の文化を紹介しよう」(国際理解) ・二〇一〇年に、東京都ではオリンピック・パラリンピックが開催されます。日本の魅力を外国人へ伝える力を付けましょう。 ・外国人観光客(例えば、<i>Foreign</i> 先生)に、あなたの好きな日本文化を紹介してみましょう。 ・事前に担任の先生のチェックをもらいます。(1週間前まで) 先生チェック ☐
1. 紹介したい日本文化	2. その説明	【例】①「衣」 和服 浴衣 はっぴ 下駄 ②「食事」 お寿司 そば てんぷら 和菓子 ③「住」 たたみ こたつ 押し入れ 囲炉裏 ④「小物」うちわ 扇子 風呂敷 ⑤「行事」初詣 節分 ひなまつり 潮干狩り お盆 月見 ⑥「場所」浅草 京都 沖縄 ⑦「習慣」お辞儀 敬語 正座 お中元 お年玉 ⑧「四季」春 梅雨 夏 秋 冬
3. その魅力	4. 選んだ理由(自分とのかかわり、具体的な経験、エピソードなど)	5. まとめ(お勤めの言葉など)

(6) 聞き手のメモ用紙

Be a Good Listener!			
★第6期目標「聞き手に魅力を伝える」 テーマ「日本の文化を紹介しよう」			
2年()組()番 氏名()			
氏 名	日 付	日本文化	感 想
1.	月 日 ()		
2.	月 日 ()		
3.	月 日 ()		
4.	月 日 ()		
5.	月 日 ()		
6.	月 日 ()		
8.	月 日 ()		
9.	月 日 ()		
10.	月 日 ()		

3 成果と課題

《成果》

- (1) 人前で話すことに慣れていったことである。1年間で3～4回級友の前で話し場数を踏むことで、初めは下を向いてしまったり緊張して声が小さくなってしまったりしていた生徒も、だんだんと人前での発表に抵抗がなくなっていった。やはり「慣れ」が大きいと考えられる。40名弱の生徒が毎日1人ずつ発表するため、1年間で約120回級友のスピーチを聞くことになる。「人前で話すのは当たり前」という空気も醸成される。そのことによる効果は大きい。
- (2) 1分程度のスピーチであれば事前に原稿を用意せずとも内容を組み立てて話せるようになったことである。次のようなステップを踏んだことが効果的であったと考える。
- ①原稿を書いて読む → ②原稿を書いて暗記する → ③要点のメモだけ書いて発表する。
- ②の後半あたりは、原稿を全て暗唱して発表するというよりは、原稿を書きはするが一言一句同じではなく、内容を伝えるというスピーチに自然に移行していった。そして③の段階はむしろ生徒は歓迎していて、原稿を書くよりも楽だという感想が多かった。
- (3) 生徒同士の相互理解、指導者の生徒理解が深まったことである。スピーチで発表者の知られざる一面が披露され、それがきっかけで友達同士の会話が始まったり、その話題でクラスが盛り上がりやすくなることがあった。自己表現の場が定期的に用意されていることの効果は確かにあると言える。

《課題》

- (1) 生徒によつてのモチベーションの差があることである。要点が書かれたメモを基にスピーチできる生徒もいれば、ただ原稿をベタ読みしてしまう生徒もいる。その差を埋めるための指導を朝学活や終学活だけで行うのは難しい。
- (2) 指導時間の確保である。原稿の添削から事前指導・事後指導まで、全て学級担任の役割となり、これらは課外で行う必要がある。そのため一人一人への指導の時間が十分には取れなかったり、担任の過重な負担となったりする場合もあった。それらを解消するためには、総合的な学習の時間を活用したり、国語科・英語科との連携が不可欠である。なぜなら学級担任は一般的なスピーチの仕方は指導できるが、クラス間での指導の差が生じてしまうことがある。一方、教科指導として行えば、系統的・専門的にスピーチを指導できるので、生徒も授業で習ったことを1分間スピーチの場で発揮すればいいということになる。

今後はこれらの成果と課題を踏まえ、より良い実践となるよう議論をしていきたい。

実践3 各教科の授業実践

1 取組のねらい

- (1) 各教科で「思考力・判断力・表現力の向上」を目指した言語活動を取り入れることで、生徒が自ら考え、その考えを共有したり深め合ったりする経験を積み上げさせる。
- (2) 「思考力・判断力・表現力の向上を目指した指導の工夫」を念頭に、指導案を作成することで、自分の授業作りを振り返り、授業改善や指導力の向上を目指す。
- (3) 思考・判断を促すための発問、教材、時間の確保といった観点を定めて参観し、意見を交換し合うことにより、指導上の工夫を共有し、指導者同士が学び合い、授業力の向上を図る。

2 期待される生徒の変容

教科のねらいを達成する過程で、情報を正しく理解し活用した上で、生徒が自分なりの考えをもち、相手に伝わるように表現することができるようになる。

3 取組の内容

(1) 実施方法

研究授業を全指導者が年1回以上行い、指導案には思考力・判断力・表現力の育成にかかわる活動を明記する。また、平成26・27年度は研究授業実施に加え、年3回以上の授業参観と授業観察シート(別紙10 p.42)の記入を行い、授業者と振り返りを共有する。

(2) 実施時期と内容

①平成25年度

9月～2月に全指導者が研究授業を行う。

4月	校内研修会	研究テーマと今年度の取組についての情報共有と共通理解
6月	研究授業実施	についての詳細告知

②平成26年度

1～2学期に全指導者が研究授業を行う。5科は各1名ずつ、校内研修会にて研究授業を実施し、東京女子体育大学教授 田中洋一氏の指導助言を受ける。

4月	校内研修会	研究テーマと今年度の取組についての情報共有と共通理解 「言葉による発信力・美しい日本語についての指導・助言」 東京女子体育大学教授 田中洋一氏
7月	研究授業①	国語 小島由起子主任教諭 漢字の組み立てと部首 東京女子体育大学教授 田中洋一氏による指導・講評
9月	研究授業②	理科 百瀬一郎主任教諭 化学変化とその利用 東京女子体育大学教授 田中洋一氏による指導・講評
	研究授業③	英語 坪田裕希教諭 Lesson 5 Our New Friend from India 東京女子体育大学教授 田中洋一氏による指導・講評

11月	研究授業④ 数学	高野由紀子主任教諭	平面図形
		東京女子体育大学教授	田中洋一氏による指導・講評
	研究授業⑤ 社会	猪俣裕紀教諭	元寇と鎌倉幕府の滅亡
		東京女子体育大学教授	田中洋一氏による指導・講評

③平成 27 年度

4 科は 1 学期に、5 科は 1 ～ 2 学期に研究授業を行う。保健体育科と国語科は各 1 名ずつ校内研修会として研究授業を行い、研究協議会を実施した。

4月	校内研修会	研究テーマと今年度の取組についての情報共有と共通理解 研究授業実施についての詳細告知
6月	研究授業① 保健体育	長谷川美穂主任教諭 水泳 武蔵野市教育委員会 統括指導主事 木下雅雄氏による指導・講評
7月	研究授業② 国語	長広友樹教諭 シカの『落ち穂拾い』 東京女子体育大学教授 田中洋一氏による指導・講評

4 思考力・判断力・表現力の育成を図る授業内活動の内容と具体例

(1) 各教科、共通の視点

- ①普段行っている活動を通して改善点を考える。
(例) 教科書の重要語にマーカーを引く活動も、指導者が指示する前にどこに引けばよいか考えさせる。
(例) 意見や考えを述べさせるような小さな言語活動を頻繁に行い、まずは自分で考えるという習慣を付けさせる。
- ②隣と机を付けた隊形を基本とし、ペアで話し合いが行いやすいようにするなど、学習環境を工夫する視点をもつ。
- ③毎時間、ただ「話し合い活動」をすればよい、というわけではない。メリハリを付け、覚える（知識）場面と、考える（思考力）場面を明確に分ける。
- ④考えさせる前に、生徒が深く考えるだけの素地（知識や情報など）をもっているかを検討する。既習事項や情報が不十分な場合には段階に応じたヒントや補足などを準備するなど、補助体制を整える。
- ⑤課題設定は、生徒から多様な意見が出るような内容にする。
- ⑥話し合いや発表活動では、指導者も一緒に考えてみる、というスタンスがよい場合もある。
- ⑦発問は漠然としたものにならないよう、条件を明示するなどして、焦点を絞る。話し合いの論点なども同様である。
- ⑧考えるという活動そのものに価値があるので、個人で考えさせる時間を十分に確保し、その後、話し合いの活動に移る。
- ⑨思考力・判断力の育成を目指す活動は授業者の意図した通りに行かないこともある。多様な生徒の考えや意見を受け止めて授業を進める。
- ⑩発表者と指導者が 1 対 1 の関係で留まらないように、できる限り全員参加型の授業になるよう工夫する。
- ⑪情報共有の方法にも様々なタイプがあるので、効果的な形を模索する。
(例) 班での話し合い → 全体の前で代表者が意見を集約した画用紙を提示し発表

(2) 各教科での活動内容と具体例

①国語

- (ア) テーマに沿って各自で題材を決め、発表を行う。
 - (例) 商品の紹介、地方の観光PR、関心のある社会問題
- (イ) 文章や図表を読み取り、熟考し、評価するという流れで活動する。
- (ウ) 解説を聞く前に、自分が興味をもった部分に印をし、その理由を考える。
- (エ) 書写で漢字の画数の違いに留意させ、大きさを工夫し、字配りを考える。

②社会

- (ア) 資料を読み取った上で、テーマについて考え、発表する。
 - (例) 「自由権の中でどの権利が大切か」について、根拠を示しながら話し合う。
 - (例) 「コンビニエンスストアを開店するならどの場所がよいか」について、根拠を示しながら話し合う。
- (イ) ある題材に対し、賛成か反対かの立場を決め、議論する。
 - (例) 地方政治の単元で学級を「市議会」に見立て、「防犯カメラの設置は人権侵害か」を考える。

③数学

- (ア) グラフや数式、図形も言語であると伝え、正しく読み取って活用する。
 - (例) 図形の性質を見つけ、発表する。
- (イ) グラフや数式を作成する。
- (ウ) 解答を合理的かつ効率的に求めるための方法を考える。
 - (例) 立体の表面積を求めるのに、展開図を用いるとよいことに気付かせ、実際にかいて確かめる。
- (エ) グループごとに解法を考えさせ、説得力のある根拠と想定される反論について考える。
 - (例) 平行線と比、比例式、方程式、円周角の定理、証明
- (オ) 立体の展開図をかき、なぜその展開図がかかるのかを説明する。
 - (例) 正多面体の頂点の個数などの求め方を考え、説明する。

④理科

- (ア) 様々な用語がどのような意味をもつのかを考える。
 - (例) 「固体から液体になる」と「水に溶ける」の違いを考える。
 - (例) 一般的に使われている言葉の中に、理科的には正しくない表現がないか考える。
 - (水蒸気、運動神経や反射など)
 - (例) 電圧や抵抗、エネルギーや仕事などの概念を考える。

(イ) 観察や実験の結果を分析して解釈し表現する。 (例) 固体の物質が水に溶けていく様子、物質の状態変化、化学変化を原子・分子のモデルを用いて説明する。 (例) 水とエタノールの沸点をもとに、赤ワインを蒸留して出てきた液体の性質を調べ、その液体が何という物質か考察する。 (例) 直列回路、並列回路の各部分を流れる電流や各部分に加わる電圧について推論する。 (例) 植物と動物の細胞を観察し、植物と動物の細胞の共通点と相違点を見いだす。 (例) メンデルの実験の方法やその結果について、丸形、しわ形などの言葉を使いながら、子や孫の形質などの特徴を言葉で表現する。 (例) これまで学んだ、結晶のでき方と結晶の大きさとの関係から、火山岩と深成岩のつくりの違いは、マグマの冷え方が異なることによることを見いだす。 (例) 気象データから、前線が通過したときの気温、湿度、風向の大きな変化を読み取り、通過した前線の性質を推定する。
⑤音楽 (ア) 曲想から読み取ったことを言語化し、発表する。 (イ) 合唱のパートごとに話し合い、練習し、全体で発表し、評価し合う。
⑥美術 (ア) 作品から読み取ったことを言語化し、発表する。 (イ) 描きやすいものではなく、描きたいものを使いたい色を用いて描く。 (ウ) 材量の特徴を知った上で、自分の求める作品にはどれを使用するか考える。
⑦保健体育 (ア) ペアになり、お互いにアドバイスする。 (例) バレーボールが手首に当たる位置と体重移動に着目し、お互いにアドバイスする。 (イ) 個人の技能を理解した上で、自分の考えやグループの考えを尊重し、ペアを決める。 (ウ) ルールやポジション、戦術などをペアやチームで確認してからゲームを行う。 (エ) 合理的な技の行い方や練習方法を考え、実際にやった上で振り返る。 (例) 映像で社会人チームの試合を見て、自分たちのチームに取り入れられることを考え、練習に生かす。 (オ) 身体機能の発達と心の健康について生徒自身の日常事例と比較させ、関係を見つけ、説明する。
⑧技術・家庭 (ア) 作品や資料から問題点を読み取り、改善策を考える。 (例) 作品の調整方法を検討し、授業で学んだ用語や図などを活用して、レポートを作成する。(技術) (例) 家庭内事故の種類と原因を資料から読み取り、安全対策を考える。(家庭)

⑨外国語（英語）

（ア）英作文に自分で考えた一文を付け加える。

（イ）場面に応じたジェスチャーを考える。

（ウ）場面、目的、伝えたい相手を踏まえ、その状況に合った表現を考える。（場面、目的、相手が変わると表現も変わるかを考えさせる）

（エ）実際にあり得る場面を設定し、トラブルの解決方法を考える。

（例）レストランで注文したものと違うものがきたとき、どう対応するかを考える。

（オ）日本語と英語のニュアンスの違いや語順、敬語の表現など、文化の違いを学ぶ。

（カ）スピーチ原稿作成や発表に向けての練習時に、生徒同士でアドバイスをする。

（例）原稿作成前にマッピング、ナンバリングという手法を用い、考えを整理した上で、原稿作成に入る。また、接続詞を活用し、流れのある文章を作る。

5 成果と課題

思考力・判断力・表現力は一朝一夕に育成することはできない。3年間の積み重ねを前提とし、各教科および道徳、総合的な学習の時間、学校行事、その他、様々な場面で「思考力・判断力・表現力の育成」を促す活動を意識して確保する必要がある。

そして、生徒の主体的活動が充実している授業でこそ「思考力・判断力・表現力」の育成が図られているということを忘れてはいけない。授業者がその意識をもち、指導を継続することで、生徒の思考力・判断力・表現力の活用が習慣化され、教科学習に広がりや深みが生まれ、より豊かな学びとなるはずである。

今回の研究授業の取組を通して、指導者が実感している成果として、以下のような生徒の変容が挙げられる。

- ・他人に自分の考えを伝えることへの抵抗感が見られなくなってきた。
- ・文章や図表から解釈→熟考→判断・評価するという一連の活動に対する抵抗は少なくなってきた。
- ・自分の意見を述べるために適切な言葉を見つけ出そうとする姿勢が出てきた。
- ・自己表現したいという意欲を感じるようになった。
- ・発表の準備段階で活発なアドバイス交換が行われ、聞き手の視点を意識したものとなってきた。
- ・他者の発表のよいところや自分の課題に気付き、相手により分かりやすく伝えようとする表現の工夫が見られた。
- ・図などを補足的に用いて考察部分をまとめる力が向上してきた。
- ・身の回りにある美しい言葉や、自分の意見を述べるための適切な言葉を見つけ出そうとする姿勢が出てきた。

そうした声が聞かれる一方で、課題も明らかになってきた。生徒たちが活動する中で、学習意欲にばらつきがみられることや、議論に必要な用語の理解が不十分なために、情報共有の際に苦労する傾向がみられることである。場面に則した言語活用ができるように、レディネスを整えながら、段階的に指導を行うことが重要である。また、設定する課題の質によるところも大きい。今後も、生徒の意欲を喚起しながら、教科指導の充実を図っていきたい。

別紙 10

平成27年度 武蔵野市立第一中学校 校内研修 授業観察シート

月 日 () 校時 教科 () 学 級 (年 組)
 授業者 () 先生 記入者 ()

観察の視点	成果が上がっている点	改 善 点
思考力 判断力 表現力の 育成が 図られたと 思われる場面 について		
☐ 授業展開 ☐ 指導技術 ☐ 生徒理解 ☐ 教材教具 ☐ 授業規律 ☐ 意欲喚起		

【自分の授業にどう生かすか】

.....

.....

.....

.....

実践5 読書活動について

1 取組のねらい

- (1) 読書に主体的にかかわる態度を育成する。
- (2) 調べ学習を通して本を活用した課題解決の方法を学ぶ。
- (3) 読書を通して思考力・判断力・表現力を養う。

2 取組の内容

- (1) 読書に主体的にかかわる態度を育成する。

平成21年度から平成25年度まで、東京都は「第二次東京都子供読書活動推進計画」を策定し、その取組の成果として、未読者率（1ヶ月に1冊も本を読まない生徒の割合）の改善が挙げられている。平成25年度の都の調査での中学2年生の未読者率は、13.2%であった（※1 p.52）。平成25年度は、本校が言語能力向上推進校としての読書活動の取組を始めた年である。次の年の平成26年11月には、本校の2年生を対象に読書についてのアンケート調査を行った（別紙11 p.54）。この結果は、未読者率は27%であった。（※2 p.52）。これはアンケートを実施した11月に、2年生が部活動の大会や定期考査などで忙しく、読書の時間を取りにくい時期だったことが関係していると思われる。しかし、不読者率の改善は、本校の読書活動の課題であると捉えた。そこで従来行っていた以下の2つの取組の充実を図ることとした。

- ・読書週間の継続実施
- ・読書活動における図書委員会の活用

①読書週間の実施時期と取組

本校では長年にわたり読書週間を設定し、朝読書を行ってきた。年2回、朝学活前の15分間で、各自が選んだ1冊の本を期間中に読み切るように読書を行っている。

平成25年度 ①6月4日（火）～14日（金） ②10月15日（火）～25日（金）

平成26年度 ①5月1日（木）～16日（金） ②10月14日（火）～24日（金）

平成27年度 ①5月12日（火）～22日（金） ②10月20日（火）～11月4日（水）

読書週間前は本の選定で学校図書館の貸出冊数が増加するので（表4 p.53）、読書週間の設定は未読者率の改善に効果があると考えられる。しかしこれでは、いつでも自ら進んで本を読むという、継続的かつ主体的な読書活動とはいえない。そこで読書週間の取組を図書委員会の生徒を中心に、図書館サポーターと連携を図りながら、より自主的・計画的に行うこととした。生徒自らの自治的活動がより活発になることで、最終的には全生徒の変容を目指したものである。

②平成27年度前期の読書週間における図書委員会の活用

平成27年度の実施時期と内容

4月13日（月） 「読書週間」及び「本の国への招待状」の、委員会内における上級生から下級生への説明会。

- 4月14日（火） 図書委員が各クラスで読書週間について説明し、本を選んでおくように呼びかける。
- 4月30日（木） 各生徒が選んだ本を集約し「読書一覧表」を完成。
- 5月11日（月） 「読書一覧表」の各教室廊下掲示。
- 5月12日（火） 読書週間開始。
- 5月20日（水） 「本の国への招待状（*）」の用紙を全生徒へ配布。
- 5月22日（金） 読書週間終了。
- 5月27日（水） 「本の国への招待状」の完成及び提出締め切り。回収。
- 7月9日（木） 回収した「本の国への招待状」の選定。各賞を決めて廊下に掲示。

*「本の国への招待状」については、「(3) 読書を通じて思考力・判断力・表現力を養う。」(p. 49, 50)にて詳述。

さらに7月9日（木）の委員会では、今年度新たに学校図書館に図書委員の推薦する本のコーナーを設けた。推薦書には書評ポップを付けるため、図書委員は読書に真剣に取り組んでいた。お昼休みのカウンター当番のときには、自分の推薦書を借りるように他生徒への呼びかけも行った。平成24年度から平成31年度の「第三次東京都子供読書活動推進計画」でも新規の取組として、「書架の配置やレイアウト、新コーナーの設置等子供が楽しく利用できる工夫」を取り上げている（※3 p. 52）。これらの工夫はすぐに効果が表れるものではないが、図書委員を中心に生徒の意識が変わりつつあることは事実である。図書委員の推薦本コーナーは、常に4、5冊の貸出があり、人気のコーナーになっている。





(2) 調べ学習を通して本を活用した課題解決の方法を学ぶ。

本校では本の活用による課題解決の方法を学ぶ機会として、学校図書館を利用した調べ学習の指導を行っている。平成 27 年度 1 学期中には、1 年生が国語の時間に学校図書館オリエンテーションと、読書週間に向けて本の選定をした。2 年生は総合的な学習の時間に職場体験に向けて職業調べをした。3 年生は総合的な学習の時間にポスターセッションに向けて環境、福祉、国際理解について調べた。今後、1 年生はセカンドスクールの事前学習として白馬での体験活動や黒部ダム等について調べ学習を行う予定である。また、ポスターセッションに向けて 1 年生は「環境」をテーマに、2 年生は「福祉」をテーマに調べ学習を行う予定である。3 年生は 2 学期中も引き続きポスターセッションに向けた調べ学習を行う。

このような活動においては、市立図書館等との連携を一層充実させて事前に図書の準備を行うなど、学校図書館サポーターの協力を得ることが不可欠である。

(3) 読書を通して思考力・判断力・表現力を養う。

「第三次東京都子供読書活動推進計画」では、主な取組として「朝読書に、子供たちが目的をもって読書できるよう『今読んでいる本の面白さを伝える』などの活動を取り入れる。」とある(※3p.52)。本校では読書週間のまとめとして生徒全員が「本の国への招待状」を作成している。「本の国への招待状」とは、自分の読んだ本を他生徒へ推薦する紹介カードである。書く項目は、「書名」「著者名」「出版社」「心に残ったことば」である。これらの項目を書くことで、紹介することを意識して本と向き合い、文章から情報を得るという思考力、他人へ紹介する内容を本から選択するという判断力、他人が読みたくなるような魅力的な体裁を作るという表現力が育成できると考えた。回収した「本の国への招待状」は、図書委員の生徒が内容を確認して、各学年の学年賞 3 名と、学校全体の大賞 1 名を選定し、職員室と学校図書館前廊下に掲示した。

本_レ国への招待状の例

本の国への招待状

年組名前

書名 読むだけです。ギリわかる日本地理

著作者 後藤 武士

発行所 宝島社

心に残ったことは▲

「日本列島の狭いという点に、海が闊く、國際化し大分、とも自國のことに無知な者も國際人ととゑめることも國はない世界中で人々が行き交ひ、その上ナチスなどの前提にナチスがある。安んずる愛國心を植へようとは思われないふるさとを愛しましようなんでも説教しようとも思わない。でも知らず教しい。いろいろ少しづつ自分自身を育てていく國の心だ。それこそ愛するべきところではあるけれど、改めるときには好きになれないといふは、指圖してほしい。ますね、知ることで始まる。ときには実際に、ときには活字を追う。ここでは筆で追ふこと、この中から、この國を探っていく。」

ここを読んで、自分の住む日本と他の國との違いと理解して、こころを張って、「日本人」といふと思ひます。今の日本は海外のつながりが強くなってきたと思います。今の日本にとってより深く知らなければならぬと思ひます。

▼二の本の魅力▲

- ① 重要語句が太字になっている！
- ② ③ ペリペリの読みやすさ！
- ④ テスト勉強にも役立つ！
- ⑤ 筆者の経験やエピソードが面白い！
- ⑥ まどまりここにまどまりた。

図がある。

こんな風に筆者の読者に同様の工夫が、はい、入っています。た人はぜひ読んで下さい。

(5 / 30) 書



3 成果と課題

今年度の読書活動の成果を計るデータとしては、学校図書館の利用統計（表4 p.53）が挙げられる。これによると、貸出冊数は4月が一番多い。これは、年度当初に学校図書館で図書館の使い方をガイダンスしたことにより新入生が本を借りやすい環境にあったことと、「読書週間」に向けて読む本の選定を課したことが理由として考えられる。先に述べたように「読書週間」の取組は、不読率改善に効果があると考えられる。一方、7月は貸出冊数が少ない。夏休みの宿題の読書感想文への取組と夏休み前貸出が、貸出冊数に反映していないのは課題である。対策として、読書感想文に向けたガイダンスと夏休み前の貸出説明を国語科の授業及び図書委員会の活動として学校図書館で行うことが考えられる。

さらに課題として挙げられるのは、生徒がどのような本を読んでいるのか、ということである。先に挙げた学校図書館の利用統計によると、学校図書館で一番貸出が多いのは日本十進分類法の「9・文学」で、毎月100冊以上の貸し出しがある。一方、その他のジャンルは貸出冊数が少なく、「8・言語」は4月を除いて毎月3冊以下であり0冊という月もある（表5 p.53）。「第三次東京都子供読書活動推進計画」でも、新たに「読書の質の向上」を目標に加えている。そこには、一人一人の興味・関心に合った本を読み、読書の幅を広げ、読解力をつけるための「読む本の質の向上」とある（※4 p.53）。読書の幅を広げることは、本校だけでなく、東京都全体の課題ともなっている。

これまでの読書活動を通しての課題をまとめると、「読書週間」期間外に生徒の貸出冊数を増やすことと、生徒の読書の幅を広げさせることである。だが、これは学校図書館の利用状況を表わす資料なので、学校外の読書活動については分からない。また表4・5は貸出についての資料であり、その本を読破しているかどうか不明である。そこで今後は、生徒の読書活動の実態を把握するために、1日の読書時間、1ヶ月の読破本数、読む本の種類、読む本の入手先などについてアンケートを採り、その結果を反映させた学校の取組を行っていききたい。

参考

※1

東京都教育委員会ホームページ「第三次東京都子供読書活動推進計画について＜概要版＞」（平成27年2月）に、「第二次計画（計画期間：平成21～25年度）」の《成果》として以下の表が掲載されている。

未読者率（不読率）の改善

	小2	小5	中2	高2
H19調査	5.8%	9.0%	23.4%	47.8%
H25調査	2.6%	5.4%	13.2%	31.8%
H25目標	2.9%	5.8%	11.7%	23.9%

※2

本校による平成26年度の「言語能力向上拠点校 報告書」に、2年生を対象にした読書についてのアンケート調査の結果を掲載した。内容は以下のとおりである。

A 春季調査（4月）の 未読者率	B 秋季調査（11月）の 未読者率	C 未読者率の変化（A－B）
21%	27%	－6%

この結果について、「2年生徒にとって11月は部活動の大会・定期考査などがあり読書時間を取りにくい時期だったが、未読者率が高くなったことは今後の課題である。読書週間の取り組み方や読書の習慣を身に付けさせるために必要な取り組みについて考えていきたい。」とした。前の月の10月に行われた読書週間の取組が、成果として継続していないことを課題としている。

※3

東京都教育委員会ホームページ「第三次東京都子供読書活動推進計画について＜概要版＞」（平成27年2月）に、「第三次東京都子供読書活動推進計画について＜主な取組＞」に以下の表が掲載されている（一部抜粋）。

小・中学生	1 不読率の改善 2 読書の質の向上	充実	7 朝読書や各教科等における読書活動の工夫	朝の時間や各教科等での学習において読書活動を効果的に取り入れている取組を紹介し、各学校における読書指導の充実を行うことによって子供の読書習慣を確立するよう支援していきます。 ① 朝読書に、子供たちが目的を持って読書できるよう「今読んでいる本の面白さを伝える」などの活動を取り入れる。 ② 各教科等の年間指導計画において、学校図書館の活用を位置付け、効果的な読書につなげる。 ③ 近隣の公立図書館と連携し、学校図書館の蔵書だけでなく、子供たちの多様な興味・関心に応じて書籍を提供する。
-------	-----------------------	----	-----------------------	---

	3 読書環境 の整備	新規	9 学校図書館リニ ューアル事例の発信	書架の配置やレイアウト、新コーナーの設置等子 供が楽しく利用できる工夫についての事例を収集 し、情報を発信します。
--	------------------	----	---------------------------	---

※4

東京都教育委員会ホームページ「第三次東京都子供読書活動推進計画について＜概要版＞」（平成27年2月）に、「第三次計画（計画期間：平成27～31年度）」《本計画の特徴》に「○読書の質の向上を新たに目標の一つに加える。」として、以下の文章が掲載されている。

一人一人の興味・関心に合った本を読み、読書の幅を広げ、読解力をつけるための「読む本の質の向上」、及び読書に喜びを感じたり、目的をもって本を読んだり、考えを深めたり、他人に伝えたりするための「読書に主体的に関わる態度の育成」を図る。

表4 平成27年度 学校図書館利用統計

学年 月	1年生 貸出冊数	2年生 貸出冊数	3年生 貸出冊数	全学年 合計
4月	259	110	90	465
5月	73	34	25	186
6月	150	31	23	219
7月	83	52	40	185

表5 平成27年度 学校図書館利用統計

月 分類	4月 生徒貸出総数	5月 生徒貸出総数	6月 生徒貸出総数	7月 生徒貸出総数
1 哲学	9	2	6	3
2 歴史	14	2	7	2
3 社会	8	8	6	4
4 自然	48	18	12	11
5 技術	6	3	3	9
6 産業	10	2	7	4
7 芸術	19	9	7	11
8 言語	15	0	2	1
9 文学	331	142	166	139

※表4・5とも（株）岡山情報処理センター開発の武蔵野市学校図書管理システムによる。

実践6 道徳授業地区公開講座での取組

1 取組のねらい

- (1) 「人との関わりを豊かに～美しい日本語を通して～」というテーマで、日本語の美しさや良さをアナウンサーの方に講演していただき、全校生徒・保護者・地域の方々とともに、美しい日本語について学ぶ機会とする。
- (2) 道徳の授業でも道徳的内容項目2【主として他の人とのかかわりに関すること】を共通の主題とし、授業と講演の関連を図り、人との関わりについて理解を深める。



2 取組の内容

(1) 実施時期と内容

①平成26年10月25日(土)

ア 道徳の公開授業

- | | | |
|----|-------|--------------------------------|
| 1年 | 2-(1) | 礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとる。 |
| | 主題名 | 礼の精神 |
| 2年 | 2-(1) | 礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとる。 |
| | 主題名 | 時と場に応じた礼儀 |
| 3年 | 2-(2) | 温かい人間愛の精神を高め、他の人々に対し思いやりの心をもつ。 |
| | 主題名 | 思いやりの心をもつ |

イ フリーアナウンサー 長谷川直子氏の講演と朗読

「人との関わりを豊かに～美しい日本語を通して～」というテーマで全校生徒・保護者・地域の方々対象に講演していただき、美しい日本語について学んだ。より相手に伝わりやすく、良い印象をもたれる話し方について、発音や表情、イントネーションなど、実際に生徒とやり取りをしながら、分かりやすくお話しいただいた。

また、「ひと房の葡萄」をピアノの生演奏を入れながら朗読していただき、日本語のもつ美しさや言葉による情景描写の見事さを体感するとともに、主人公の心情に深く迫ることができた。

ウ 保護者・地域の方々と講師との交流

②平成27年9月19日(土)

ア 道徳の公開授業

- | | | |
|----|-------|--------------------------------|
| 1年 | 2-(1) | 礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとる。 |
| | 主題名 | 礼の精神 |
| 2年 | 2-(2) | 温かい人間愛の精神を高め、他の人々に対し思いやりの心をもつ。 |
| | 主題名 | 温かい人間愛 |
| 3年 | 2-(2) | 温かい人間愛の精神を高め、他の人々に対し思いやりの心をもつ。 |
| | 主題名 | 思いやりの心をもつ |

イ 文化放送アナウンサー 鈴木光裕氏の講演と朗読

「美しい日本語～言葉は生きている～」というテーマで、地域在住の文化放送アナウンサー鈴木光裕氏から、言葉は相手に伝える道具であり自分の思いを言葉で伝えることの大切さを学んだ。野球の実況放送やインタビュー等の経験を通してのお話や「甲子園への遺言」（伝説の打撃コーチ高島導宏の生涯）の朗読もあり、言葉の重みと人の心のすばらしさを学ぶ機会となった。

ウ 保護者・地域の方と講師との交流

3 成果と課題

話の専門家であるアナウンサーによる講演は、生徒及び保護者や地域の方々にも大変興味深く、新鮮なものであった。生徒や保護者の感想には「普段の言葉遣いや人と話すときの表情に気を付けようと思った」「日本語の良さを再認識した」など、言葉のもつ力に改めて心を動かされたという感想が多く見られた。地域の方々との懇談会においても、日本語の敬語のすばらしさや、メール等のコミュニケーションツールの良さと弊害に関する話題など、活発に意見が交わされた。

課題としては、保護者・地域の方々の参加が少なかったことが挙げられる。学校ホームページや学校便り等で情報を発信し、より多くの保護者や地域の方々の参加を促し、家庭や地域でも同じ視点で話題とすることにより「美しい日本語」に対する意識が一層高まると考えられる。

VI 研究の成果と課題

3年間を通し様々な教育活動において、言語活動の充実を図りながら「思考力・判断力・表現力の育成」を目指した取組を行ってきた。教科指導での取組はもちろん、毎朝行っている「1分間スピーチ」、読書週間における「本の国への招待状」の取組、道徳授業地区公開講座での講演、総合的な学習の時間におけるポスターセッションの取組など、生徒たちは学校生活の多くの場面で言語活動を取り入れた活動を行ってきている。

その3年間の成果として、「自分の意見を述べるための適切な言葉を見つけ出そうとする姿勢が出てきた」、「他人に自分の考えを伝えることへの抵抗感が見られなくなってきた」、「自己表現したいという意欲を感じるようになった」、「他者の発表の良いところや自分の課題に気づき、相手により分かりやすく伝える表現の工夫が見られる」といった生徒の変容を私たちは実感している。

このことは次に示した、平成24・25・26年度の学校評価アンケートにも表れている。

ア 言語活動の充実を図る授業を行っている

A あてはまる B ややあてはまる C あまりあてはまらない D あてはまらない

生徒（人数）	A	B	C	D	わからない
平成24年度(315)	38%	41%	8%	0%	13%
平成25年度(311)	34%	43%	9%	2%	12%
平成26年度(331)	42%	39%	9%	2%	7%

保護者（人数）	A	B	C	D	わからない
平成24年度(261)	24%	42%	3%	0%	31%
平成25年度(258)	26%	36%	5%	1%	32%
平成26年度(274)	35%	37%	6%	0%	23%

教職員（人数）	A	B	C	D	わからない
平成24年度(23)	24%	52%	5%	0%	10%
平成25年度(23)	18%	68%	14%	0%	0%
平成26年度(22)	33%	48%	5%	0%	14%

イ 課題解決、情報処理、表現などの能力が身に付いている

A あてはまる B ややあてはまる C あまりあてはまらない D あてはまらない

生徒（人数）	A	B	C	D	わからない
平成 24 年度 (315)	29%	53%	11%	1%	6%
平成 25 年度 (311)	25%	54%	11%	1%	9%
平成 26 年度 (331)	37%	41%	10%	4%	7%

保護者（人数）	A	B	C	D	わからない
平成 24 年度 (261)	13%	52%	17%	4%	13%
平成 25 年度 (258)	13%	52%	16%	3%	16%
平成 26 年度 (274)	19%	49%	15%	1%	15%

教職員（人数）	A	B	C	D	わからない
平成 24 年度 (23)	29%	43%	24%	0%	5%
平成 25 年度 (23)	14%	59%	18%	0%	9%
平成 26 年度 (22)	24%	57%	10%	5%	5%

このように、「言語活動の充実を図る授業を行っている」「課題解決、情報処理、表現などの能力が身に付いている」それぞれの質問に対して、生徒、保護者、教職員のいずれにおいても、取組を始めた平成 25 年度では大きく変化は見られなかったが、平成 26 年度には肯定的に捉える意見が多くなったという結果が出ている。

教科指導だけではなく様々な教育活動で言語活動を取り入れた取組を行うことにより、思考力・判断力・表現力の向上を教員と生徒は実感するようになった。また、このような取組は保護者にも認知されつつある。

課題としては、生徒の主体的な活動である言語活動を、教科や領域の年間計画の中でどのように位置付けるかである。限られた時間の中でバランスよく言語活動を取り入れながら、どのように考える力と伝える力の育成を図るかを十分検討する必要がある。

また、集団の質や学習意欲のばらつきにより、なかなか議論や話し合いが成立しないこともある。興味・関心を高めるための指導法の工夫や、段階的な指導が重要である。

今後も生徒の「生きる力」としての確かな学力を育むため、「思考力・判断力・表現力」を高める指導法の工夫を行っていきたい。

御指導いただいた講師の先生方

東京女子体育大学	教授	田中 洋一氏
(一財) NHK放送研修センター	日本語センター専門委員	加藤 昌男氏
(一財) NHK放送研修センター	日本語センター副センター長	渡部 英美氏
Swimmy LLP 代表	フリーアナウンサー	長谷川 直子氏
文化放送アナウンサー		鈴木 光裕氏
武蔵野市教育委員会	統括指導主事	木下 雅雄

研究に携わった教職員 () は年度 ◇ 研修主任 ○ 研修委員

校長	松岡 敬明 (25, 26)	若槻 善隆 (27)	
副校長	竹山 正弘 (25, 26, 27)		
国語科	小島 由起子 (25, 26)	長広 友樹 (25, 26, 27)	富澤 美智子 (27)
社会科	黒河内 香甫里 (25, 26)	猪俣 裕紀 (25, 26, 27)	棚田 一之 (27)
数学科	高野 由紀子 (25, ◇26)	山福 義明 (25, 26, 27)	近藤 竜也 (25, 26)
	近藤 史 (25)	宇田川 裕規 (27)	坂下 博之 (27)
	小坂 尚貴 (27)		
理科	三田 秀雄 (25)	良方 一賀 (25, 26)	百瀬 一郎 (25, 26)
	山本 洋輔 (27)		
英語科	入江 裕美子 (◇25)	藤木 香織 (25, 26, 27)	古賀 魅香 (25, 26)
	坪田 裕希 (26, 27)	宇都宮 佐和子 (27)	
音楽科	中村 克彦 (25, 26, ◇27)		
美術科	高木 兼治 (25, 26, 27)		
保健体育科	真船 由妃 (25)	奥 超雄 (25, 26, 27)	長谷川 美穂 (26, 27)
技術家庭科	松井 厚 (25, 26, 27)	須田 優子 (25)	加賀 奈都季 (26)
	山田 佐登美 (27)		
難聴学級	飯田 佳緒里 (25, 26)	池田 美奈子 (25, 26)	伊藤 明子 (26)
	島田 剛 (27)	山田 勝巳 (27)	
養護教諭	尾崎 博美 (25, 26, 27)		
学校図書館サポーター	毛利 裕子 (25, 26, 27)		